

大学卓球こそが日本の卓球を支えている

2023年5月 川嶋弘文



各校がプライドを懸けて戦う学生リーグが最も熱い卓球大会のひとつだ/撮影：Rallys

この日学連アゴラを読んでいる方の多くは、大学まで卓球を続けている方がほとんどだと思いますが、私も「大学まで卓球を続けたことで人生が変わった」一人です。

自己紹介が遅れましたが、川嶋弘文と申します。1983年生まれの39歳で、慶応義塾大学体育会卓球部OB。現在はラリーズという卓球メディア企業と金沢ポートというプロ卓球チームを経営しています。

中高大と部活で卓球に熱中した後、大学卒業後は、学生時代に卓球を通じてお世話になった方々のご縁により電力会社やベンチャー企業で勤務し、今はありがたいことに大好きな卓球を盛り上げることで自分が私の仕事になっています。

■大学まで卓球を続けて良かった理由とは

冒頭でも申し上げましたが、私は「大学まで卓球を続けて良かった」と感じたことが沢山あります。卓球が多少強くなったことはもちろんですが、それ以上に団体戦で勝つために役割分担をしながらライバル研究や、強い高校生のスカウトなどを創意工夫しながらやり

抜く経験は、社会に出た後にそのまま仕事にも応用がききました。

また、一生付き合える先輩後輩や友人との出会いが人生を豊かにしてくれています。私は就職、転職のときは必ず大学時代に卓球を通じて知り合った方々に相談をしました。また、現在も起業時の資金調達、プロ卓球チームを立ち上げ時のスポンサー営業、メディアで取材をする時などなど、人生の重要な局面では必ず卓球人脈にお世話になり、なんとかやっけてもらっています。

実はこのような貴重な経験のベースにある組織が学生卓球連盟であることに、卒業からしばらく経った頃から実感はじめていました。日学連と各地の学連がインカレや学生リーグ、全日学を主催してくださるからこそ、学生生活の中でも試合に勝つという目標が出来、本気になれば、そして学生卓球の終着点とも言える大学卓球を謳歌できるのです。

■ 「大学卓球」こそが日本の卓球を支えている



日本の学生アスリートは世界でもリスペクトされています(2023年4月 於：マレーシア)/撮影：Rallys

卓球の普及という面でも大学卓球の果たす役割はとて大きいものがあります。各大学の卓球部は、勧誘や強化を目的に高校生や中学生を招いて練習をする機会も多いと思いますが、その事自体が子どもたちに長く卓球を続けるきっかけを提供しており、卓球の普及に直接貢献しています。こういう観点からも学連を中心とした大学卓球部のネットワークが全国の卓球を支えていると言っても過言ではありません。

私もメディアやプロ卓球チームなど、色々な角度から卓球に触れていますが、大学卓球の果たしてきた役割とそのポテンシャルは非常に大きいと感じます。

先日も縁があって朝日大学とマレーシアナショナルチームの合同合宿に立ち会う機会がありましたが、日本の学生選手たちが朝早く練習場に行き、自分に厳しく真剣に練習し続ける姿や、海外選手と英語や翻訳アプリを駆使しながら積極的にコミュニケーションを取る姿は、海外の代表選手たちにとっても模範になっていたことを目の当たりにしました。

また、プロリーグとしてあらゆる面でまだまだ発展途上なTリーグと比較しても、学生たちが本気で長年運営してきた全国各地の学生リーグでのプライドを懸けた戦いの熱量が非常に高いことも身を持って感じています。（一方でこの学生卓球の魅力メディアを通じてまだまだ伝えきれていないこと、プロリーグを盛り上げられていないことは当事者として変えていかなければならないと覚悟を持っているところでもあります。）

■改めて伝えたい学連の皆様への感謝

学連の仕事は、各所への配慮が必要な大変な仕事だと思います。体育館の確保から、選手登録や組み合わせの作成、当日の運営進行や設営撤収まで。

決して目立つ仕事ではありませんが、ミスが許されず、責任も伴います。それが故にその一つ一つの細かいタスクが日本の卓球を支えている重要な仕事であるとも言えます。

私は日学連とそこに所属する選手たち全員が日本の卓球を支えるインフラであり、プラットフォームであると思います。

大学までは大好きな卓球を頑張る。卒業後は、社会のあらゆる地域・組織で卓球部OBOGたちが活躍し、日本の卓球を支える。

そんな理想の循環を支える日学連であって欲しいと願います。もちろん私も伴走させていただきたいと思いますのでいつでもお声がけください。ありがとうございました。